HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 高校内居場所カフェとは何か ： 3つの側面からの把握 |
| Author(s) | 横井, 敏郎 |
| Citation | 早稲田キャリア教育研究, 13, 58-60 |
| Issue Date | 2022-03-26 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/92863 |
| Type | journal article |
| File Information | yokoi_highschool_ibasho_cafe.pdf |




Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

## 第Ⅰ部　基調講演

# 高校内居場所カフェとは何か—３つの側面からの把握—

横井敏郎（北海道大学）

### はじめに

高校内居場所カフェが大阪府立西成高校で開設されたのは2012年である。それから10年近く経ち、全国に少しずつ広がっている。2018年の新聞記事では、全国で50校程度あるようである。

高校内居場所カフェは高校内に設けられたスペースであり、NPO等の外部組織のスタッフが入って簡易な飲食も提供しながら生徒と会話したり、生徒がくつろぎながら自由に過ごすことができる場である。月数回、開催されることが多く、基本的に教師は立ち入らないので、サードプレイスと捉えられている。

学校によって実施のされ方が異なっている。会場は空き教室や学校図書館などさまざまであり、そこで行われている内容もただ生徒が自由に過ごせる場を提供し、スタッフと会話するだけのところもあれば、飲食の提供に力を入れたり、時にイベントを開催したりするところもある。

高校内居場所カフェは新聞記事にも取り上げられ、また実践者たちによる書籍も刊行され（居場所カフェ立ち上げプロジェクト2019）、その取り組みに対する社会的認知度は少しずつ高まってきている。サードプレイスと言っても学校の中に置かれたものである。困難な状況にある生徒や若者を支える取り組みは他にも展開されているが、なぜ高校内居場所カフェに注目すべきなのか、これはどのような実践なのかを考えてみたい。なお、筆者はこれまで札幌市立札幌大通高校の校内居場所カフェ「ドーリプレイス」を参与観察してきており、それを念頭に置いて高校内居場所カフェを捉えているが、ここでは紙幅の関係でその具体的な様子については割愛する（横井2020に短い紹介がある）。

### 高校内居場所カフェ実践の３つの側面

高校内居場所カフェとはどのような実践なのか。ここでは、初期的ソーシャルワーク、校内居場所づくり、ユースワークの３つが結合した実践として把握してみたい。高校内居場所カフェにおける活動すべてがいずれかに区分されるわけではない。１つの活動が他の機能を同時に果たす場合もあるが、総体的に見ればこれら３つのベクトルが組み合わさった実践であり、場であると考えられる。以下、簡潔に説明したい。

### 初期的ソーシャルワーク

まず、いうまでもないことだが、高校内居場所カフェは貧困やさまざまな課題を抱えた生徒を支援することを目的としている。最初にこれを大阪府立西成高校で開設した田中俊英氏が明瞭に述べているように、ひきこもりの若者には高校中退経験者が多く、これを防ぐために高校内で相談活動を行う場としてカフェを設置したのである（小川他2019）。社会的包摂がこの大きな目的であり、田中氏は居場所カフェの活動を「ソーシャルワークの始まり」と呼んでいる（居場所カフェ立ち上げプロジェクト編2019）。筆者

が参与観察している札幌大通高校においても、何らかの課題を抱えた生徒と出会い、その生徒を必要に応じて適切なソーシャルサービスにつなぐことが目的とされている。

ただ、「始まり」であるから、ソーシャルワークそのものではなく、その前段にある出会いの場といえる。問題はソーシャルワークを必要としている生徒にいかに出会うかである。相談室を設けても、自分の問題を明瞭に認識し、そこに自主的に向かう生徒は少ない。そこで、相談という名目を外して多数の生徒と出会えるよう、「カフェ」というオープンな場が用意されたのである。

### 校内居場所づくり

初期的ソーシャルワークの場として誰でもが入ることができる「カフェ」という形態が採用された。この場は生徒が自由にくつろぎ、話ができる場である。当然のことながら、そこは学校教育の場と切り離され、別の論理で編制される場でなければならない（横井 2019 も参照）。学校は教育内容や学習のプロセスを公定、標準化し、達成度を評価する論理で編制される場である（生徒指導もそのアナロジーで捉えられよう）。そのような教育と評価の枠組みが貫徹しては、生徒の本音や日常を引き出すことはできないため、ここは校内にありながらも、サードプレイスとされるのである。

それはまさに居場所と言い換えることができよう。居場所という言葉は多義的で曖昧さが残るが、大きく見るならば、当人の存在が否定されたり、軽んじられたりしない安全で安心な場であり、他者とのそのような関係性が可能な場ということはできよう。基本的に教師は居場所カフェにはおらず、もちろん家庭からも離れている。

さらには、ここは特定の課題の達成を目的とした場所として設定されていない点も重要である。高校内居場所カフェによって取り組みが異なるが、生徒が進学や就職といった進路達成が望ましいとしても、そのために講習会などを行う場ではない。あくまで生徒がそのままでいる場であり、いるだけということが許容される場である。

### ユースワーク

高校内居場所カフェは初期的なソーシャルワークが目的だとしても、それを前面に押し出して取り組む場ではない。札幌大通高校のドーリプレイスの場合、スタッフがやっていることはもっぱら話しかけることである。休み時間や授業後に訪れた生徒たちは、銘々に飲食や友だちとのおしゃべり、トランプやゲーム、バイトまでの時間つぶし、教科書や参考書での勉強などさまざまなことをしている。遠巻きに眺めている生徒もいる。スタッフたちはこれらの生徒にただ話しかけ、生徒の話を聞くのである。

ドーリプレイスのスタッフたちは、自分たちの仕事は生徒に話しかけ、生徒と会話し、関係性を作ること、そして生徒の自己実現を少しでもサポートすることだという。これはまさにユースワークの本質ともいえる実践である。ユースワークとは「若者の個人的な可能性を引き出す」ことを中核とする教育実践であり（Davies 2015）、若者の声を引き出すために話し、聞き、関係を作るというインフォーマル学習である（Batsleer, 2008）。

### おわりに

以上、３つの側面から高校内居場所カフェという実践の把握を試みた。キャリア支援という言葉は一般にはほぼ就職支援の意味として使われている。しかし、キャリアが自己実現というより広く大きな意味で捉えられるならば、高校内居場所カフェ実践は結果的にキャリア支援の役割を果たすこととなろう。高校生が自らの人生のための小さな一歩を進めようとするときにサポートし、その可能性を引き出すことが高校内居場所カフェである。

## 引用文献


Batsleer, J. R., (2008) *Informal Learning in Youth Work*, London: Sage Publication

Davies, B. (2015) Youth Work: A Manifesto For Our Times - Revisited, *Youth & Policy* No.114

居場所カフェ立ち上げプロジェクト編 (2019)『学校に居場所カフェをつくろう！――生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援』明石書店

小川杏子・田中俊英・石井正宏 (2019)「高校内居場所カフェ実践は学校に何をもたらすか：2つのカフェ運営の事例から」『公教育システム研究』第18号、107-125

横井敏郎 (2019)「解題／高校内居場所カフェ実践の意義を考える―公開研究会「高校内居場所カフェ実践は学校に何をもたらすか」に寄せて―」『公教育システム研究』18、127-135.

横井敏郎 (2020)「高校内居場所カフェという実践」『教育』893、88-93.